

高齢者への家庭訪問実習の経験がその後の看護学実習に活用される内容

藤井 可苗・中村有美子
菅野 夏子・小野ツルコ

抄 録

本研究の目的は、家庭訪問実習終了時に学生が実習経験を今後の学習に活かせると考える内容を明らかにし、その内容が2年次の看護過程実習に活用されたかを明らかにすることである。家庭訪問実習を履修した102名を対象に、1年次の本実習終了時および2年次の看護過程実習終了後に無記名自記式アンケート調査を実施した。その結果、今後活かせる内容として3カテゴリー《コミュニケーション》、《対象理解》、《学習意欲》であることが明らかとなった。それらの内容が2年次の看護過程実習で活かせなかったとの回答は、《対象理解》において約20%と多い傾向であった。今後、家庭訪問実習の特徴である生活をとらえる視点が家庭だけでなく病棟等の場を越えて活用でき、対象理解を深められるよう助言することにより、ヒューマンケアリングの実践能力を高める看護教育につながると考えられた。

キーワード：家庭訪問、高齢者、看護教育

I. はじめに

地域看護領域で行われている家庭訪問は保健師活動の援助技術の一つであり、個人および家族のくらしの場に分けあって提供される支援技術である¹⁾。家庭訪問は保健師にとって原点であるが、実際の生活の場を直接見聞きすることは、対象者を理解する視点を広げることにつながるため、看護を実践する看護師にとっても重要と考えられてきた。さらに、近年の看護学生の生活体験不足に起因する臨床実習中の問題行動が報告されており²⁾、看護学生にとって生活を理解するためには、知識だけでなく経験することが必要と考えた。そこで、A大学の看護学教育では、平成21年度より1年次生後期に高齢者への家庭訪問実習を実施している。この実習は、ヒューマンケアリングの実践能力育成を目指す看護基礎教育の1年次に実施することにより、多様な価値観を認め、対象者を統合体として理解することが可能になると考えて開講した。

本研究では、家庭訪問実習終了時に学生が実習での経験を今後の学習にどのように活かせると考えているか、2年次の看護過程実習終了時に学生が家庭訪問実習での経験を活かせたのかを明らかにし、今後の実習指導の基礎資料を得ることを目的とした。

Kae Fujii
Yumiko Nakamura
Natsuko Sugano
Tsuruko Ono
関西福祉大学看護学部

II. 家庭訪問実習の概要

1. 実習構成および家庭訪問実習のねらい

A大学の看護学実習は、1年次前期の基礎看護実習I（1単位45時間）、1年次後期の家庭訪問実習（1単位45時間）、2年次後期の看護過程実習（2単位90時間）、3年次後期から4年次前期の各論実習（合計17単位765時間）、4年次後期の統合看護実習（2単位90時間）で構成されている。

家庭訪問実習のねらいは、①人々の健康に関する考え方や行動を理解し、健康に関するニーズを理解する基礎的な能力を養うこと ②対象者が利用している福祉サービスや医療機関を知ることにより、看護の活動の場の幅広さ、保健医療福祉の繋がりを理解することである。この実習を体系的な教養教育を中心に学んでいる1年次に開講することにより、2年次以降に看護実践を展開する病棟実習に効果的であると考えた。2年次後期の看護過程実習は、初めて受け持ち患者に対して看護の必要性を明確にし、日常生活援助技術を実施することが目的である。その際には、受け持ち患者と援助的関係を築き、健康問題が日常生活に及ぼす影響を理解して看護上の問題を明確にする必要がある。患者との関係形成や生活の理解には、家庭訪問実習による経験が活かされるものと考えた実習構成である。

2. 家庭訪問対象の選定

A大学が所在する市内の老人クラブ会員を対象に、家庭訪問実習の意義および目的を説明し、家庭訪問受け入れ希望者を募った。希望者の内、実習開始期間前に再度

意向調査を行い、受け入れを了解された家庭とした。

3. 実習展開

実習は、1回につき3コマを8回で実施した。その内訳は、全体のオリエンテーションや講義を2回、家庭訪問3回、家庭訪問前後のグループおよび全体カンファレンス3回であった。学生は2人1組で1家庭を担当し実習期間中に2～3週の間隔で同一家庭に3回の訪問を行った。初回訪問は教員の同伴訪問とし、2回目3回目は原則として学生のみでの訪問であった。家庭訪問時には、対象者の健康に対する考え方や生活リズム、生活する上で気をつけていること、利用している福祉サービスや医療機関等について話を聞いてくることにした。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

家庭訪問実習を導入した平成21年度に履修した看護学部1年次生102名を対象とした。

2. データ収集方法

①家庭訪問実習8回の総括終了後の講義室にて全員に無記名自記式アンケート用紙を配布した。アンケート用紙の配布および説明は、研究者が行った。調査内容は、家庭訪問実習での学び、今後の学習に活かせると考える内容、実習で気をつけたことについてであり、自由記述にて回答を求めた。回収は、講義室の外に設置した回収ボックスにて回収した。

②2年次の看護過程実習終了から約1ヶ月後の講義室にて全員に無記名自記式アンケート用紙を配布し、講義室外に設置した回収ボックスにて回収した。アンケート用紙の配布および説明は、研究者が行った。調査内容は、①の調査の回答より抽出されたサブカテゴリ8項目について看護過程実習で活かされたか、2年次の看護必修科目に家庭訪問実習が活かされたのかについて、「おおいに活かせた」「少し活かせた」「あまり活かせなかった」「全く活かせなかった」の4段階で回答を得た。

3. 倫理的配慮

アンケート用紙配布と同時に研究目的、研究協力の任意性、匿名性の確保、成績評価と関係がないこと、結果の公表について記載した文書を用い、口頭で説明をした。また、研究者が実習担当者でもあるため、アンケートは無記名であり、記入の有無にかかわらず学生の成績には影響しないことなどを説明し強制力が働かないよう配慮した。アンケート用紙の提出をもって研究の同意が得られたものとした。なお、本研究については、関西福祉大

学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 分析方法

①家庭訪問実習終了後のアンケートについては、学生が記述したすべての文章を抜き出し、カテゴリ化した。調査内容の家庭訪問実習での学び、実習で気をつけたことについては、次年度の家庭訪問実習の実施方法を検討するために利用したため、今回の分析からは除外した。

②看護過程実習終了後のアンケートについては、記述統計を用いて分析した。調査内容の2年次の看護必修科目に家庭訪問実習が活かされたのかについては、本研究では看護過程実習との関連に焦点化したこと、報告書として報告済みであるため分析からは除外した。

Ⅳ. 結果

1. 家庭訪問実習を今後の学習に活かせると考える内容

対象学生102名にアンケート用紙を配布し、91名から回答を得た（回収率89.2%）。そのうち、「家庭訪問実習を今後の学習にどのように活かせると考えるか」との質問には84名から記載があった（有効回答率92.3%）。

以下、《 》はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、「 」は具体的な記述を示した。記載された内容を分類した結果、3カテゴリ《コミュニケーション》40件、《対象理解》36件、《学習意欲》21件の総件数97件であった。

カテゴリ、サブカテゴリ、具体的な記述を表1に示す。

1) 《コミュニケーション》

カテゴリ《コミュニケーション》は、2つのサブカテゴリから構成された。「コミュニケーションは相手がいて成り立つため、相手のことを理解する姿勢」といった〈コミュニケーション技術〉に関する記述が32件、「コミュニケーションの取り方を活かして、信頼関係を築きたい」という〈コミュニケーションの意義・活用方法〉に関する記述が8件であった。

2) 《対象理解》

カテゴリ《対象理解》は、4つのサブカテゴリから構成された。「看護の知識だけを学ぶだけでなく、その人に合った考え方や接し方を考えるべきだと学んだので次の実習に活かしていきたい」といった〈個性の尊重〉に関する記述が12件、「相手の言葉を理解することを学べたので、相手の気持ちの理解につながると思う」という〈考え方や気持ち〉に関する記述が10件、〈生活の理解〉と〈観察の重要性〉に関する記

述が各7件であった。

3) 《学習意欲》

カテゴリー《学習意欲》は、2つのサブカテゴリーから構成された。「今回の訪問では、知識が少なく、応答に困り、気付いたこともアドバイスできず、知識の少なさを感じたので、今後の勉強の動機づけになった」という〈積極的な学習態度〉に関する記述が15件、〈体験を通しての理解の深まり〉に関する記述が6件であった。

2. 看護過程実習での活用

対象学生102名にアンケート用紙を配布し、47名から回答を得た（回収率46.1%）。看護過程実習での活用に関する8項目に無回答であった4名を除いた43名を分析対象とした（有効回答率91.5%）。

家庭訪問実習を今後の学習に活かせると考えていたサブカテゴリー8項目について、看護過程実習で活かすことができたかを「おおいに活かせた」「少し活かせた」「あまり活かせなかった」「全く活かせなかった」の4段階で回答を得た（表2）。「おおいに活かせた」「少し活かせた」との回答を合わせると、カテゴリー《コミュニケーション》

の〈コミュニケーション技術〉が88.3%、〈コミュニケーションの意義・活用〉が88.4%、カテゴリー《対象理解》の〈対象の生活や理解〉が79.1%、〈対象の考え方や気持ちの理解〉が81.4%、〈対象の観察の重要性〉が83.7%、〈対象の個別性の尊重〉が83.8%、カテゴリー《学習意欲》の〈積極的な学習態度〉が81.4%、〈体験を通しての理解の深まり〉が86.1%であった。「あまり活かせなかった」「全く活かせなかった」との回答は、《対象理解》の〈対象の生活の理解〉が20.9%、〈対象の考え方や気持ちの理解〉が18.6%、〈対象の観察の重要性〉と〈対象の個別性の尊重〉が16.3%、《学習意欲》の〈積極的な学習態度〉が18.6%、〈体験を通しての理解の深まり〉が13.9%、《コミュニケーション》では11.6%であった。

V. 考察

本研究目的は、家庭訪問実習終了時に学生が実習での経験を今後の学習にどのように活かせると考えているか、2年次の看護過程実習終了時に学生が家庭訪問実習での経験を活かせたのかを明らかにし、今後の実習指導の基礎資料を得ることであった。その結果として、家庭

表1. 看護学生が家庭訪問実習を今後の学習に活かせると考えた内容

N=91

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
コミュニケーション	コミュニケーション技術 (32件)	高齢者との接し方、高齢者を取り巻く環境をどのようにしていくか コミュニケーションは相手がいて成り立つため、相手のことを理解する姿勢
	コミュニケーションの意義・活用方法 (8件)	コミュニケーションの取り方を活かして、信頼関係を築きたい たくさんの相手とコミュニケーションをとることで、相手の気持ちを正確に読み取ることができるようになると思う
対象理解	個別性の尊重 (12件)	看護の知識だけを学ぶだけでなく、その人に合った考え方や接し方を考えるべきだと学んだので次の実習に活かしていきたい 相手の背景をしっかりと知り、見ることができる
	考え方や気持ち (10件)	相手の言葉を理解することを学べたので、相手の気持ちの理解につながると思う 看護での人とのふれ合いで、気にかけることや、受け止め方などの関わりの場面で、その人の理解、考えていることなど、読み取ること
	生活の理解 (7件)	人は常に自己実現を求め生活をしていることが理解できた これから看護を学ぶにあたって、病院以外の高齢者の様子が見れてイメージがしやすくなった
	観察の重要性 (7件)	会話だけで情報を得るのではなく、表情や生活環境によって得ることが勉強できた 人をもっと良く理解しようとする観察力
学習意欲	積極的な学習態度 (15件)	今回の訪問では、知識が少なく、応答に困り、気付いたこともアドバイスできず、知識の少なさを感じたので、今後の勉強の動機づけになった 「わからなかったら調べる」ということを身をもって体験した
	体験を通しての理解の深まり (6件)	教科書で見たり、読んだりするより、実際にみた方が、何倍も印象的に頭に残ると思う 看護の現場で困ったときの対処を考えたとき、良いアイデアにつながるのではないかと思う

訪問実習終了時のアンケートから、今後の学習に活かせる内容として《コミュニケーション》40件が最も多く、次いで《対象理解》36件、《学習意欲》21件という3カテゴリーであることが明らかとなった。また、家庭訪問実習終了後に今後の学習に活かせる内容として見出されたサブカテゴリー8項目について、看護過程実習で80～90%程度で活かせたと回答していたが、活かせなかったとの回答が多かったのは、〈対象の生活の理解〉が20.9%、〈対象の考え方や気持ちの理解〉が18.6%でありカテゴリー《対象理解》において多い傾向にあった。以下、得られた結果についての考察を述べる。

1. 調査方法

家庭訪問実習終了時のアンケート回収率は89.2%であったが、看護過程実習終了時のアンケート回収率は44.1%と半数に減少していた。その理由としては、アンケート実施時期が家庭訪問実習を終了してから半年経過していること、家庭訪問実習での経験を想起できるように実習経験を説明はしたが、家庭訪問実習とその後の履修科目や看護過程実習に活かされたかどうかという関連性を見出すことが難しく、アンケートに回答しにくかったのではないかと考えられた。よって、得られた回答は、本実習の学びが深かった学生の意見が多いことが予想された。

2. 家庭訪問実習の今後の学習への活用

1) コミュニケーションについて

コミュニケーションは、対人関係技術の一つである。看護の対象となる人々はあらゆる健康状態にあるが、看護者が臨床で出会う人々は病む人であり、苦痛や不安、生活上の困難さを抱えており、そのような対象となる人々を全人的にとらえるために対人関係技術は重要視されている³⁾。しかし、近年の看護学生の会話の状況は、家庭内や友人間など親しい間ではよく保たれているが、距離のある教師や地域の人々との会話が少なく接する機会も少ないという現実が明らかにされ、

様々な年齢や社会背景を持った人々に対して具体的にどのような接し方が必要であるかを想起することが難しいと考えられてきた⁴⁾。今回の家庭訪問実習で世代を超えた初対面の高齢者とのかかわりは、どのように接していけば良いのか戸惑いながらも、体験することがコミュニケーション方法や意義について考える機会になったと考えられた。また、3回の家庭訪問を繰り返すことにより、時間を要しながらも対象者との関係性が築かれたことが、学生自身の自信につながり、今後活かせる内容としてコミュニケーションが最も多くあげられたのではないかと考えた。

コミュニケーション技術やコミュニケーションの意義については、約9割の学生が看護過程実習に活かせたと回答していた。看護職者としては、社会的なコミュニケーションから専門的なコミュニケーションへの切り替えが必要とされている⁵⁾。家庭訪問実習は、地域で生活している高齢者を対象として健康に関する考え方や行動について会話したのであって、対象者の苦悩や要望を引き出したわけではない。看護過程実習で専門職としてのコミュニケーション能力を身につけることができたかということは評価できなかった。看護基礎教育として、専門職者のコミュニケーションについて、学生の実習段階に応じて各実習の特性を反映させながら意味づけていくことが必要であると示唆された。

2) 対象理解について

カテゴリー《対象理解》は、〈対象の個別性の尊重〉〈対象の考え方や気持ち〉〈対象の生活の理解〉〈対象の観察の重要性〉という4つのサブカテゴリーから構成された。

今回の家庭訪問実習は、病棟実習とは違い、対象者の生活の場に身を置くという特徴があった。その上で、学生は健康をキーワードとした考え方や価値観、生活の知恵をじっくり聞いてきた。家庭訪問は、対象のあ

表2. 家庭訪問実習での経験が看護過程実習に活用された割合

人 (%) N=43

質問項目	おおいに活かせた	少し活かせた	あまり活かせなかった	全く活かせなかった
コミュニケーション技術	25 (58.1)	13 (30.2)	4 (9.3)	1 (2.3)
コミュニケーションの意義・活用方法	23 (53.5)	15 (34.9)	4 (9.3)	1 (2.3)
対象の個別性の尊重	22 (51.2)	14 (32.6)	6 (14.0)	1 (2.3)
対象の考え方や気持ちの理解	18 (41.9)	17 (39.5)	7 (16.3)	1 (2.3)
対象の生活の理解	19 (44.2)	15 (34.9)	8 (18.6)	1 (2.3)
対象の観察の重要性	24 (55.8)	12 (27.9)	6 (14.0)	1 (2.3)
積極的な学習態度	20 (46.5)	15 (34.9)	7 (16.3)	1 (2.3)
体験を通しての理解の深まり	22 (51.2)	15 (34.9)	5 (11.6)	1 (2.3)

りのままで自然な姿、すなわち、その人らしさを最も尊重できる支援技術⁶⁾といわれているように、学生は家庭訪問先で話を聞くと同時に、家の中を見ること、日常生活の一部に触れることによって、対象者の生活が具体的にイメージできるようになったと考えられる。小泉ら⁷⁾は、看護学生の対象理解に高齢者へのライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果を報告した。それによると、高齢者へのインタビューによって、看護学生は高齢者の育った時代背景や人生経験の長さ、体験の多様性を感じ取り、前向きな考えや生き方、活動的な生活を学んでいることが明らかにされた。本実習においても、高齢者の方から話を聞くことができ、個性や生活の理解につながったのではないかと考えた。看護職者として、対象者の多様性を認め、個性を尊重したケアの実践は非常に重要なことであり、早期にその一端を感じ取れたことは良い経験といえる。この点から、本実習1点目のねらいである人々の健康に関する考え方や行動を理解し、健康に関するニーズを理解する基礎的な能力を養うことが達成されていると考えた。

しかし、看護過程実習で活かせなかったとの回答は、〈対象の生活の理解〉が20.9%、〈対象の考え方や気持ちの理解〉が18.6%であり《対象理解》において多い傾向にあった。この点については、家庭と病棟という場の違い、健康レベルの違いが影響しているのではないかと考えた。林ら⁹⁾によると、看護学生の中でも専門科目の学習や臨地実習を経験した4学年は1学年よりも、対象者の受容や隠れたメッセージを引き出すなど、より深く広く理解しようとしており、学びや実践を習得していることが明らかにされていた。個性を尊重し、生活をとらえる視点が家庭だけでなく病棟等の場を越えて活かせるように実習指導時に助言し、より対象理解が深まっていくことが期待された。

3) 学習意欲について

家庭訪問実習を今後の学習への《学習意欲》として記述されたものは21件であった。1年次の学習は、教養科目が多く、専門科目の履修は少ない。専門科目の必要性が理解され、学習意欲につながったことは評価できると考えた。しかし、本実習の今後の学習への活用記載数は21件と多くはなかった。看護学生が自ら何をすべきかを考えて行動するきっかけの一つとして、新しい体験や感謝される体験からの喜びがあったと報告されていた⁸⁾ことから、対象者からのプラスのフィードバックが看護学生としての学習意欲を引き出

すことにつながることを考えられる。今後、学生の記録や対象者から直接聞いたプラスの評価を教員が学生にフィードバックすることで看護学生としての学習意欲の向上に役立てていきたい。

また、〈積極的な学習態度〉が看護過程実習に活かせなかったという回答は18.6%あった。さらに、本実習2点目のねらいである対象者が利用している福祉サービスや医療機関を知ることにより、看護の活動の場の幅の広さ、保健医療福祉の繋がりを理解するという点については、本研究結果だけでは達成されたとはいえなかった。学生は、家庭訪問実習での学びを他の科目と結びつけて理解を深めることが不十分であると考えられる。看護学教育としての家庭訪問実習の意義や位置づけが理解できるように、教員がディスカッションの中で意味づけをしっかりと行っていくことが重要であると示唆された。今後、本実習の意義や学習効果を全ての教員が共通認識し、2年次以降に開講される講義や実習中に学生に効果的なアドバイスがされていけば、コミュニケーション能力を活用した対象理解につながり、ヒューマンケアリングの実践能力を育成できる看護基礎教育につながると考えられた。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は、看護学生への家庭訪問実習の取り組みについて1学年のみを対象に効果を検討したものである。今後は、本実習が看護学教育として効果があるのか、調査を重ねていく必要がある。

引用文献

- 1) 平野かよ子：新版保健師業務要覧（第2版），50，日本看護協会出版会，東京，2008.
- 2) 川田智美，木村由美子，木暮深雪，他：看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面，群馬保健大学紀要，26，133-140，2005.
- 3) 高橋照子編：看護学原論，100-107，南江堂，東京，2009.
- 4) 長家智子：看護学生のコミュニケーションに関する研究，九州大学医学部保健学科紀要，1，71-82，2003.
- 5) 坪井良子，松田たみ子編：考える基礎看護技術（第3版），24-34，ヌーヴェルヒロカワ，東京，2005.
- 6) 前掲書1）50-53.
- 7) 小泉美佐子，伊藤まゆみ，宮本美佐：老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果，老年看護学，5（1），140-146，2000.
- 8) 大林陽子，高橋弘子，恵美須文枝，他：育児支援訪問ボ

ランティアにおける看護学生の体験や学びに関する検討, 愛知県立看護大学紀要, 14, 37-43, 2008.

- 9) 林綾乃, 曾田信子, 杉浦伸一: 第1学年と第4学年の比較による看護学生の高齢者に対するイメージと知識・理解、コミュニケーションの特徴, 日本看護医療学会雑誌, 13(2), 45-55, 2011.